

この人に聞く

国際教養大学と「中国」

語る人…… 国際教養大学 理事長・学長 中嶋 嶺雄氏
聞く人…… 「原点」編集長 武藤 拓自

平成十九年十月二十九日（於）国際教養大学学長室

東大に並ぶ

武藤

中嶋先生は最初の立ち上げからこの大学に係って来られまして創立から理事長と学長を兼務され、引っぱって来られました。

いまこの大学は東北大や北大以上、東大と同レベルの偏差値の大学ということで内外から驚きの目で見られていますね。

中嶋

この大学のことではじめて相談を受けたのは東京外国語大学の学長だった平成十二年四月でした。板東久美子副知事が来られて学長室でお会いしたのが最初でした。

国際系の大学ということで構想をまとめたのですが、県議会では承認されなかったんですね。それでこの話はなくなったかと思っていたところ、その



中嶋先生と武藤（右）

あとの知事選挙で寺田さんが公約として国際系の
新大学設立を掲げて再当选され創設準備委員会が
設立されて、私が委員長になりました。

自分が学長になるとは全く思っていませんでした
ので気軽に引き受けたんです。(笑)

明石康さんも委員でしたから。

大学の名前をどうするかということでもこれも県民
にアンケートを取ったりして絞り込んで四つ残っ
た名称を、最終的にはお母さんたちの集まりで意
見を聞きましたら国際教養大学がいい、となって
決った訳です。英語ではAkita International
Universityですが、国内向けは国際教養大学です。
この前韓国の高麗大学の創立百年式典に招待され
て行きましたら一番最初にAkita International
Universityが出ていました驚きました。アルファ
ベット順だと上位に来るのは分からない訳でもあ
りませんが……。それに外国人からすると「アキ
タ」という表音はとても快く響くんだそうです。
この大学過剰の時代に大学を新設するからには、
日本を代表する本格的な国際系大学にしようと取
り組んで来ました。しかし、意外に秋田の方がこ

の大学のことをまだ知らないんです。その意味で
も本誌の読者の方々には、よろしくご理解をお願
い致します。

気骨の中国学者

武藤

中嶋先生が東京外国語大学の教授だった昭和三
十年代から四十年代、先生の著作をよく読ませて
いただきました。

昭和四十年代はじめ文化大革命の頃、中国研究者
やマスコミの多くはこの“革命”を褒め讃えて
いましたが先生だけは冷静で客観的な見方をされ
ていたことに、あの頃から敬服しておりました。
怒られるかも知れませんが超一流の学者であるこ
とに誰も異存はないでしょうが、ゼロからスター
トする大学運営となると苦労するのかな、と思っ
ていたんです。(笑)

大変申し訳ありませんでした。(笑)

今年早稲田が創立百二十五年、慶応が百五十年
といわれますが特徴に乏しいといわれる大学が多
い中で中嶋先生の理念が根づいたこの大学は特筆

されるべきと思っっているんです。

中嶋

入学試験も国公立大学の前期日程、後期日程という一種の「護送船団」のような受験生の囲い込みには最初から加わらず、独自の日程でやっています。

「暫定入学」と言っって、残念ながらスレスレで不合格になった受験生を「特別科目等履修制度」で若干名受け入れ、成績が伸び一定のレベル以上になった学生には、二年次になって初めて入学金を払ってもらおうという制度も本学だけがやっています。

「武士道」を必読書に

武藤

授業は日本語を一切使わず英語オンリーで行なっているようですが、英語に堪能な人材というだけではないに、人格の陶冶という視点から新渡戸稲造の『武士道』を学生の必読文献としておられるんですね。

ここにも先生の理念や哲学をみて取れるように思っています。

中嶋

ご承知のように李登輝さんも六月六日本学に來られて、『武士道』を一つのテーマにして講演されました。

新渡戸稲造はもともと英語で『武士道』を書いたんです。

武士道を日本の文化の精華と見なしていました。どの民族でも同じですが自国の文化や伝統に誇りを持っていない人は国際人としては通用しません。英語ペラペラ日本語ウスッペラでは相手にされません。

いっぽうインターネット情報の八割以上は英語情報です。やはり英語が十分にできなければグローバルなこの時代、社会人として“通用”しないという面も直視する必要がある訳です。

李登輝先生と「原点」

武藤

李登輝先生の講演は私も聞かせていただき感謝しました。

李登輝さんで思い出しましたが、李登輝さんは政治家としては数少ない、司馬遼太郎さんから賞讃

されている方です。

実はヒューマンクラブと機関紙「原点」も司馬さんから『街道をゆく』でお褒めいただいているんです。九嶋会長と菅さんが編集長の時代でした。李登輝さんもヒューマンクラブ、『原点』も司馬さんからお褒めいただいたという点で共通しているんです。(笑)

中嶋 李登輝さんは六月、象潟の蚶満寺に行かれまして。

蚶満寺の熊谷能忍和尚と司馬さんは戦友だそうですね。

『街道をゆく』に司馬さんが書いています。

武藤 ハイ、李登輝さんはその事もご承知で蚶満寺に行かれたのかも知れませぬね。

今回李登輝さんは芭蕉の「奥の細道」を辿る旅としていましたね。

中嶋 司馬さんは『街道をゆく』の最後に台湾で李登輝さんにお会いして、日本人が失ったものをお持ちであることに深く感銘したんですね。

李登輝さんは戦前日本の教育を受けた方ですが、『武士道』を体現している方と見たんです。

武藤

来春はじめて卒業生が出るようになりますが、就職希望者の内定率がすでに九割を越えていると聞きました。

先輩、OBもないのにすごい数字ですね。

中嶋 世界展開しているトップ企業の求人が多いんです。

学生たちは企業のネーミングだけではなく、将来を見据えて冷静に選択しているようです。

来年の九月からは専門職大学院が開設されます。

これはグローバル・コミュニケーションを目ざしたものでこれも我が国に前例がないものです。

あれほど国連に貢献していながらなぜ日本が常任理事国になれないかということについて、『ニューズウィーク』のザカリヤ国際版編集長は日本人のコミュニケーション能力の弱さ、具体的には英語力の弱さを指摘しています。

こういう点でも国際貢献ができる人材を養成したいと思います。

この前わか杉大会の折、皇太子殿下も本学をご訪問され、激励をいただきました。

大学院開設

武藤 我が国の中核として世界に活躍する人材が輩出

される大学との印象を一層強くしました。

大学設立四年で大学院も開設されるというのはあまり聞いたことがありません。

大きくはないがキラリと光る大学、少数精鋭の特徴ある大学と見ました。

青春の大切な一時期この秋田で過ごす学生には良い思い出の地であって欲しいと多少忸怩たる思いで願っています。(笑)

第二のキャンパス

中嶋 このキャンパスは一学年百三十人、全寮制で生活しています。

また海外からの留学生も年間を通じれば百名以上います。

本学の学生は海外に一年必ず留学することになっています。

たんに留学するだけでなく三十単位前後を取得することを課して勉強させています。

これも日本の他の大学には見られないことだと思っ

ています。

中高教諭に英語のSETTS

武藤 先進的な取り組みですね。

非常に残念で申し訳ないと思うのは、この前体育館と多目的ホールの施設が県議会を通らなかった。教育はカネを出して口を出さないのが一番(笑)と思うんですが……。

中学、高校の教諭に英語の教授法を教えるセッツ(SETS, Summer English Teaching Seminar)もやっていますね。

中嶋 県議会の方は本学の地域への貢献について、もっと理解していただければ、いずれ通るものと期待しています。(笑)

実はこの大学は十億円ほどの初期投資で発足した例のない安い費用でできた大学でもあるんです。が、私の試算ではこの大学が将来千人規模となれば毎年年間二十数億円以上の経済効果がこの地域にもたらされます。

それが永続することになる訳です。

教職員とその家族も含まれますから。

この前小中の学力テストで秋田県がトップになりましたね。

いずれ高校の英語の学力テストの結果も公表されますが、本大学では毎年夏休みの期間を利用して県内の中学、高校の英語の先生に二週間集中的に研修を行なってきました。毎回約七十名を受け入れており、秋田県の各中高の先生の教育力向上の一助になっていると思います。

武藤

いろんな意味で地域にも貢献されているんですね。

中嶋先生は「教育再生会議」のメンバーですね。

「中央教育審議会」のメンバーでもあった。

国は先生を大学教育界の代表とみなしていますね。

中嶋

教育再生会議のメンバーが野依良治座長以下、近いうちに本学を視察することになっています。

武藤

学生を含め大学関係者は県外や海外からが圧倒的に多いようですが、秋田の行事にも積極的に参加されているようですね。

中嶋

ええそうです。竿灯なんかにも喜んで参加していますし、地元に

馴染もうとしています。

武藤

県民がもっと関心を持ち、いろんな意味で支援すべき大学との思いが強まりました。

話題を少し変えますが、それは先生の専門分野についてです。

中嶋

先生は現代中国研究の第一人者ですが、いままでも中国に関する著作はどれほど出版されていますか。

正確に数えていませんが、訳書や共著を加えると百冊を超えていると思います。

武藤

そうですね。十代から先生の著作を読ませてもらっています、先生は決してはじめから反中国でも反共でもなかったと思っています。

疑問を持ったきっかけは何ですか。

疑問を持ったきっかけは何ですか。

中嶋

孫文百年祭の衝撃

一番のきっかけは文化大革命です。東京外語大の教員になりたての頃、公務員は共産圏に行けなかった。

文部省が許可しないんです。

人事院総裁にかけ合って中国が孫文生誕百年記念大会を主催するというので何とか許可を貰って北京に行ったんです。

孫文と関係の深い日本人は外国からの賓客ということで人民大会堂の前列に座らされたんですが、ヒナ壇の要人がみな左のほうから入って登壇しているのに主催者である国家主席の劉少奇と党総書記の鄧小平がいない。孫文の未亡人の宋慶齡さんは中央にいました。

いぶかっていると開会直前にこの二人だけが右側から遅れて入って来た。

ところがうって代って拍手もなければ新華社など報道機関のフラッシュも一切ない。

式典の主役は周恩来総理で、毛沢東礼讃に終始し、最後に「毛主席語録」を振りかざして「毛主席万岁、万万歳」とシャガレた声で絶叫しました。

この間劉少奇は苛々した様子で顔面蒼白、頻りにタバコを吸っていました。

鄧小平は「今に見ていろ」という物凄い形相で周恩来をにらみつけていましたね。

この日を最後に劉少奇は公衆の前に姿を現わすこ

となく悲惨な最期を遂げました。

鄧小平はこれを機に失脚、以後復活、失脚、また復活と目まぐるしい権力闘争を生き抜きました。

この孫文の式典のあと上海に出て紅衛兵に追い回されたりして路上で半分ちぎれたビラを拾った。

それに劉少奇は党内第一の実権派、第二の実権派は鄧小平と書かれていました。

このビラはいまも大切に持っています。

当時まだ文革の実体がハッキリしていなかったので、こうしたもろもろの事実から文化大革命は大衆を動員した権力闘争だという視点が確立できた訳です。

あれがマルクス主義と訣別する転機でもありませんた。

間違いでなかったことはその後の歴史が証明していると思っています。

この文革期に私が『中央公論』に書いた文章「毛沢東北京脱出の真相」を李登輝さんが読んでくれていて、のちに親交がはじまった訳です。

武藤

大変な歴史的場面に立ち合われたんですね。

“文革”が一応収束したあと数少ない友党の

アルバニア共産党の訪中団に対し毛沢東は「文革は劉少奇から権力を奪うためのものだった」と言っていますね。

文革の犠牲者は七千万人ともいわれています。

日本の「悪虐非道」どころの話でない。

劉少奇の遺骨は遺言によってあとで海に撒かれませんでした。医者までも劉を虐待したそうですね。

周恩来は総理のまま生涯を全うしましたが、遺言で遺骨を飛行機で山河に撒かせました。

中国で散骨の風習は聞きませんが権力者が代ると墓まで暴いて辱めるのは中国の伝統ですから、この二人はそれを避けたかったのだと思っています。中国の権力者の苛酷な運命を感じます。

あまり言っている人はいないようですが、劉少奇と周恩来はソリが合わなかったとずっと前から思っていたんです。

というのは文革の前から「人民中国」を毎月読んでいましたが、この二人が談笑している写真は見たことがないんです。

避けているようにその頃から思っていました。

毛沢東の思惑に乗じて周恩来は劉少奇失脚に加担

したと思っっているんです。まちがっていたらお教え下さい。

鄧小平復活には周恩来が中心的役割を果たしていますよね。

毛沢東が主導した馬鹿げた「大躍進」政策が惨めな失敗に終り数千万から億ともいわれる餓死者がでた。「農村で人肉を喰っている現状を記録にせよ」と劉少奇は毛に迫ったそうですね。

「大躍進」の失敗のあと党の実権は劉が握り、それを毛は文革というデタラメな手法で五十年かけて奪権したということでしょう。

林彪国防相を毛沢東の後継者に指名までして軍を掌握し、紅衛兵を使って地方の末端組織まで徹底して破壊した。権力を自分ににするだけのために。スターリンと甲乙つけ難い。

劉少奇も毛沢東と同じ湖南省の出身ですね。

周恩来と劉少奇は眉目秀麗で明晰な頭脳という点で人後に落ちない。年令も同じでした。

共産党がすべての上位にある国ですから、劉は周より序列が上でした。周の分野の外交にも劉は自ら踏み出した。

劉少奇がインドネシアを訪問し夫人の王光美と共にスカルノに会った。その時王光美夫人はチャイナドレスで同席した。

それを毛沢東夫人の江青が激しく嫉妬したといわれていますね。要人の夫人でもまだ外国に同伴ということがなく、公の席では人民服の時代でしたね。

江青はたしか十二年も王光美を「監獄」に閉じ込め陰湿な扱いをしている。

王光美は美人で四ヶ国語を話せるインテリです。こうして見ると思想信条以前の「業」が歴史をつき動かしているように感ずるんです。王光美も遺言で散骨しているでしょ。共産党や中国人に対する「不信」を看て取るんですが……。

鄧小平に落胆

中嶋 鄧小平の復活で彼に期待したのですが、一九八九年の天安門事件で彼は民衆のデモを武力で鎮圧し、民主化の流れを潰しました。

いわゆる改革・開放派の胡耀邦総書記や趙紫陽首

相を失脚させた主役でした。

それ以来中国に幻想を抱かなくなりました。

武藤 鄧小平によって文化大革命は正式に否定されましたが、いま七千七百万といわれる中国共産党員と幹部の多くは文革で「毛主席語録」を振りかざした人たちと思うんですが。

中嶋 矛盾しているんですよ。

天安門にはいままも毛沢東の写真だけが掲げられ、人民元の紙幣の肖像も毛沢東です。

ただ一点変わらないのは共産党一党独裁ということです。

「民主」も「平等」も共産党の許容内だけということなんです。

日本に勝ったのは毛沢東と中国共産党のおかげとというのがあの国のアイデンティティになっているんです。

そういうことにしなければ共産党の存在意味がなくなってしまう。

武藤

ということとは中国共産党が「光」り続けるためには「凶悪」な日本が今後必要とされるんでしょうね。蒋介石の国民党も日本と戦ったんで

すが、中国ではいま共産党だけが戦って日本に勝利したことになるんでね。

日本人はアメリカには敗けたと思っけていますが中国共産党に敗けたという実感はない。

私は天安門事件の前の年、旧満州や上海、北京に行きました。

戦没者慰霊の団体に同行したんですがバスも飛行機も行く先々でどういう訳か通訳がいつも隣りに来て話しかけて来るんです。

どの通訳も共通して言っていた事は「この国はすべてコネの社会」というのでした。

帰ってからのあの国は遅かれ早かれ騒乱が起きると言っていました。案の定そうになりました。

鄧小平が二度目の復活をし権力基盤を確立してからの事です。

「コネ」の話は一党独裁の当然の結果でしょう。

来年は北京五輪、その二年後には上海万博ですが市場経済と一党独裁がいつまでも共存できるものか関心があります。

モノ凄い格差

中嶋

所得格差も日本の格差なんてものでない。

地方と都市の格差も大変です。

環境汚染もひどい。

間もなく三峡ダムが完成しますが、その影響も未知数です。

平穩が続くとは考えにくい。

中国の政権交替はいつも夥しい流血が伴いますが、台湾の李登輝さんだけは例外でこの流れが続いています。

中国の歴史では特筆すべき事で李登輝さんは二十世紀の忘れられない政治家となるのではないでしようか。

先の六月のドイツ、ハイリゲンダムサミットで安倍総理が胡锦涛主席との会談を申し込んだら「日本が李登輝の講演を認めるなら応じられない」と断わられたそうですね。「日本は自由の国だ、そんなことはできない」と安倍総理が突っぱねたら「会談しましょう」となったんだそうですね。

李登輝さんが秋田で講演した数日前です。

安倍内閣以降、中国の対日政策に変化が見られる

ようですが、先生はこれを戦略的政策変更と見なされますか。

中嶋

中国はあちこちで起きている農民反乱に見られるように、社会的矛盾が深刻化しており、反日デモなどもうやっけていられない状況です。従って、中国の側から対日姿勢を宥和的に変えて来ているのであって、その意味では戦略的変更でしょう。

しかしだからといって「中国の脅威」や「世界覇権」への衝動を甘く見てはいけませんね。

武藤

中華思想では台湾は「化外の地」で中国ではなかった。

サンフランシスコ平和条約でも台湾の帰属は中国に、とは一言も書かれていませんね。

中嶋

そのとおりです。

台湾に武力侵攻しないよう日本とアメリカの外交の智慧が今後一層求められると思っています。

日本の戦前を彷彿

武藤

台湾の経済力は世界でも有数でしょ。

中国は膨張主義、覇権主義は採らないと言っている

ますが、近隣諸国とエネルギー絡みのトラブルがいっぱいありますね。尖閣のガス田も然りです。

戦前日本が石油資源を求めて南進したのと似た状況を感じます。

中嶋

アフリカのスーダンそれに中央アジア、ミャンマー、北朝鮮とか、独裁国とつぎつぎ手を結んでいます。

武藤

資源さえ確保できればその国の国民の人権なんか「そんなの関係ネエ」（笑）ように見えますね。

福沢諭吉は幕末にアメリカに渡り「文明」を実感した。

これを中国、朝鮮にも理解してもらって共に近代化しようとなりました。

しかしこの国々の聞く耳を持たない固陋さに失望している。

福沢は理念や理想を慶応に結晶しようとしたんだと思います。

中嶋先生は一時期中国に期待し、その現実から我が国の武士道にアイデンティティを見出し後進を育てようとしています。

世界情勢を熟知して我が国の状況を憂え、大学を

立ち上げたという点で公立と私立の違いはありませんが、中嶋先生の国際教養大学と福沢諭吉が慶応を立ち上げた「原点」には共通するものを強く感じています。

我が国の教育のため一層のご活躍を心から期待しています。

今日は長い時間貴重なお話をありがとうございました。

プロフィール

中嶋 なかじま
嶺雄 みねお

国際教養大学理事長・学長。国際社会学者。社会学博士（東京大学）。1936年長野県松本市生まれ。

1977年東京外国語大学教授。1995-2001年

東京外国語大学学長。1998年-2001年国立大学協

会副会長。その他、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）

国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員、財

団法人大学セミナーハウス理事長などを経て現在、内閣

教育再生会議有職者委員を兼務。

オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォル

ニア大学サイディエゴ校大学院の客員教授を歴任。

著書は「現代中国論」「中ソ対立と現代」「国際関係論」「北京烈烈」（サントリー学芸賞受賞）「中国・台湾・香港」など多数。2003年「正論大賞」受賞。



お話を伺ったあと、
中嶋先生と武藤（左）山平（右）左端は磯貝秘書室長（学長室にて）

環境と文化

原点

No. 163

Human Club
ヒューマン・クラブ

対談 「今なら話そう」
西木正明会長，金田勝年氏

この人に聞く 国際教養大学と「中国」
国際教養大学理事長・学長
中嶋嶺雄氏

講演 「世界の屋根」で幻の花を捕らえた
畠山陽一氏



シスパーレに向かう小松由佳さん